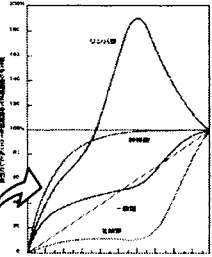


1 体育科における知識創造とは

体育科における現状

スキヤモンの発達曲線



* 1 神経系の発達を見ると、ゴールデンエイジと呼ばれる10歳前後の子どもの多様な運動経験の重要性がわかる。

運動にかかわる知識

* 2 運動を通して自分で体感し得る知覚をさす。評価観点の「知識・理解」に限定しない。

ここ数年、「子どもの体力向上」という言葉を目にする機会が増えている。しかし、全国的に様々な取り組みがなされてきているにもかかわらず、子どもの体力は低下し続けており、そして、それはかなり深刻な状態であるという認識が高まってきている。

児童期は運動神経系の発達がほぼ完成される時期であり、容易に運動技能が習得できる大切な時期^{*1}である。このような発達特性からみて、身体の特定期所に負荷がかかる運動や筋力を高める運動等は望ましくないと考えている。

私たちは、取り上げるそれぞれの運動の特性を活かし、児童期に「運動することは楽しいと実感しその体験を積み重ねていくこと」を大切にしてきた。ここでいう運動の楽しさとは、「運動それぞれのもつ特性にふれる楽しさ」「自己の運動技能の可能性を求め運動にかかわる知識^{*2}を獲得していく楽しさ」「友達とふれ合う楽しさ」であり、それらが関連し合う中で、「心と体が開放される心地よさ」が実感できると考える。

自己の運動技能の可能性を求め、運動にかかわる知識を獲得するためには、子ども自身が、自己に目を向けることが必要である。そうすることで「どのように体が動いているのかわかる」といった、身体感覚による気づきを得ることができる。保健学習においても、健康な生活を送りよりよく体を育むために、自分の生活をふり返る等、自己に目を向けることが大切となる。

また、子どもが運動を通じ「友達とふれ合う」中で、交流する楽しさを感じたり、互いに教え励まし合って学び方や身体感覚の気づきを得たりすることができる。それによって、運動にかかわる知識を獲得することができるといえる。

その際、運動にかかわる知識を獲得したことを、友達に認められ肯定されることが重要である。他から肯定される体験があつて、運動にかかわる知識そのものや、それを得た自分の価値を認めることができるのである。

このように、子どもが運動を楽しんでいる活動を行い、「自己に目を向ける」体験や、「友達とかかわる中で運動にかかわる知識をもつことのよさを実感する」体験を積み重ねていく。それが、主体的によりよい生活を形成することへのプロセスとなるだろう。

以上のことから、私たちは体育科における「知識創造」を以下のように定義する。

運動を楽しむことのよさに気づき 健康な生活を送るために 運動を自らの生活に活かそうとする営み

2 体育科における「場」をデザインするための考え方

体育科の学習において、「楽しく運動する」に終わらず、運動の楽しさの体験を積み重ね、「運動を楽しむことのよさ」を実感することが重要である。そのため以下のように、かかわりの「場」をデザインする。

(1) 自己に目を向け身体感覚^{*3}による「気づき」^{*4}をうながす

身体感覚

* 3 回転感覚、逆さ感覚、支持感覚等、様々な身体感覚によって、身体を動かすことが可能となる。

「気づき」

* 4 身体感覚による「気づき」を指す。

「気づき」があつて初めて、自分で意識的に体をコントロールしたり、相手や物の動きを予測しながら動くことができる。この「気づき」には、意識されている場合と、なんとなくできたという無意識の場合とがあるだろう。「自分の体がどうやって動いているのか」と体の使い方を意識することで、その運動がわかることにつながる。

低学年の子どもの発達特性として、自我意識と集団意識が未分化の時期であると言われていている。例えば個々に願いをもつことはできるが、友達がどのように考え、動くかと予測することは難しい。また自己に目を向けることも同様である。しかし、この

ような低学年の子どもも学習意欲は高い。さらに中高学年と同じように「どうやったらできるのか」という方法や、よりよい体の使い方等を考えながら、学習に取り組むこともできる。そのため、低学年の学習意欲の高さを活かして、中高学年につなげていきたい。教師は子どもの思いに沿いながら、体や動きを意識させることで、「気づき」をとらえさせることが大切だと考える。

このようにして「気づき」を獲得しながら学習してきた子どもは、中学年以降も様々な運動に対して主体的に取り組むことができるであろうし、運動にかかわる知識を獲得しながら、運動を楽しむこともできるであろう。

早期より「気づき」を獲得させるためには、以下にあげる手だてが有効であると考えられる。

一つは、思考から子どもが「気づき」を得るために、形態の工夫を行うことである。小グループで活動し、友達の動きと自分の動き、友達同士の動きを比較する中で違いを見つけたり、それを伝え合うことから、身体感覚による気づきが生まれやすくなる。

次に、変容に気づくよう言葉による働きかけを工夫し、自己の体へ意識を向けさせることが重要である。発問は、全体での学習課題という場合もある。また低学年で多く見られるが、子どもは楽しく運動することをめあてとし、教師は高次のねらいをもって学習に臨む場合もある。学習課題に限らず、一人一人に応じた、教師のねらいを意図した言葉による働きかけも大きな支援となる。

さらに、鏡や、ビデオ等視聴覚機器を使うことによって、自分の姿や変容を客観的に見ることができる。そのような用具・機器の活用も有効である。

「気づき」を獲得させるための手だて

①形態の工夫

②言葉による働きかけの吟味

③用具・機器の活用

(2) 友達とかかわる中で 自己に目を向け 運動にかかわる知識を獲得することのよさを実感させる

運動にかかわる知識を獲得するよさ

肯定される場

前項では、自己に目を向けることによって「気づき」を促すための手だてを述べたが、本項では、友達とかかわる中で、「気づき」がより知識創造に対して強固になるということを述べることにする。

前述のように、運動にかかわる知識をもっているということを、他から認められ肯定されることが大切である。体育科において、以前より運動ができるようになる・動き方がわかるということは、それまでもっていた運動に対する価値観が広がるということである。またできるようになるまでの運動に取り組む姿勢や、自己に目を向け自分で気づくことは学び方にも通ずる。このような価値を、かかわりによって他から肯定されることにより、運動がわかること・できることや、できるようになった自分に対して、達成感や自己有能感をもつことができる。また、友達とかかわりにも発達特性がある。教師が、発達特性を考慮しながらかかわりあって学ぶ場を創ることで、運動にかかわる知識を獲得することのよさに気づかせることができるだろう。

把握の重要性
自己内で比較する

このような変容を子ども自身が実感するために、以前の自分と今の自分を比較させることが有効である。子どもが自己に目を向け、現状を正しく把握することにより、比較が可能となり、自己の変容を実感することができる。

めあてを持つ

教師は一人一人の現状を十分に把握し、子どもに適したねらいをもつ。明確なねらいを教師がもつことで、そのための支援と評価がはっきりとし、見通しをもって単元を構成することができる。単元全体の見通しを子どもにも提示することで、子どもは、「現在の自分が学習をすることによってどのように変容したいのか」といった運動に対する前向きなめあてをもつことができるだろう。

学習カードの活用

変容を把握するために、学習カードを活用することも有効である。ただし1時限の運動量をしっかり確保することを念頭において活用する。書くことで、子どもが自己に目を向けること、思いを表すこと、さらに体への気づきやかかわりについて他へ広めることが容易になること等メリットも大きい。子どもの発達特性を考慮し、書くことの必然性を子どもがもてるような場を保障しながら活用したい。

3 実践例 - 6年 -

(1) 単元名 リズムダンスダンス

(2) 本単元における知識創造

リズムに合わせて動くことや友達と合わせて動くことを通して 運動を楽しむことのよさに気づく

本来、子どもは体を動かすことが好きである。音楽が流れてくると、心や体がリズムに合わせて動き出す。特に動きは決まっていないものの、運動が得意不得意に関係なく、子どもはリズムをとる。しかし、思春期に入ると、自我が目覚め、人前で体を動かすことに抵抗を感じたり照れたりする子どもが現れる。そのような子どもでも、決まった動きであれば安心して体を動かすことができる。

そこで、本単元では運動会で行った準備運動（リズムダンス）を踊ることを始める。そして、これまでの、友達と同じ動きで楽しく踊る活動から、自分たちの考えた動きを加えていく活動へ進める。さらに、新しい曲を選び、自分たちのオリジナルの動きで踊りを創る活動へと進めていく。

そのように少しずつ活動を発展させていくことで、それまでは踊りを創ることは難しいと感じていた子どもや踊ること自体に抵抗感を持っていた子どもも、自分たちの考えた動きを生かして踊りを創ることができるという喜びを味わう。このとき、隊形を生かした動きを入れるなど工夫しながら、リズムに合わせて踊る楽しさや、友達と一緒に合わせて動く楽しさが、より広く深いものへとつながっていくだろう。6年では、友達や他のグループの動きを見て、そのよさを感じ取り、自分のグループにも生かそうとすることも大切である。このように、よりよい動きを工夫しながら踊ることを積み重ねる中で、踊ることという運動の特性にふれる楽しさや友達とふれ合う楽しさにも気づかせることができるだろう。

さらに、「リズムや友達と合わせて踊ることは楽しい」と感じることは、心や体が開放される心地よさに気づくことにつながっていき、今後、主体的に自分の生活に生かそうとするであろうと考える。

(3) 知識創造の力を育むために

① 本単元におけるかかわりの「場」のデザイン

まず、全員が決まった動きで踊ることで、人前で踊ることに抵抗感のある子どもでも安心して取り組みると考える。動きは8呼間のリズムで構成されていることに気づかせるために、今まで踊ってきた動きは変えずに、曲を変えて踊る活動を行う。そして、くり返し踊ることで、リズムに合わせて踊ることは楽しいと感じさせたい。楽しいと感じてくると、新しい動きを試みたいという欲求が生まれるであろう。そのとき、新しい動きを取り入れることだけでなく、よい動きについても考えさせたい。子どもはよい動きを、リズムや友達と合わせることで、また、大きくスムーズでメリハリのある動きであると考えているであろう。くり返し踊ることで自分の動きがリズムに合ってくることや、友達の動きと合ってくることに気づいていくと考える。

本単元では1グループを六人で構成し学習する。この六人という人数は互いに見合うことができ、グループでの踊りの隊形を形づくる上でいろいろ工夫が考えられる人数である。また、動きを考えると、一人一人がアイデアをもち寄ると、数種類の動きが集まる。その中から選んだり、組み合わせたりすることができる。

各グループには、新しい動きを考えたら記録できるように、動きを書き込む振りつけメモをもたせる。その振りつけメモは、グループごとにストックしいつでも参考にできるようにする。

この学習では、自分や友達、グループの変容に気づかせるために、ビデオカメラで記録を撮らせる。客観的に記録した映像を見ることで、自分や友達、グループの動きを確かめることができる。毎時間見合い、自分の動きと友達の動きを比較していく中で、友達の動きのよさをとらえ、自分の動きに活かしていくようにうながしたい。その際、グループ内で互いに動きを認め合っていくことによって、もっとよくしたいと考え始めるであろう。映像はグループ内にとどめず、他のグループを全体で認め合う場にも活用していきたい。

② かかわりの「場」を支える長期的な取り組み

4月の陸上運動では、走の体の動きについていくつかの視点をもたせて学習した。速く走る友達の腕や足の動き、クラウチングスタート時における腕支持での肩の位置である。身体感覚による気づきが意識化されていない子どもでも視点をもたせることで、コツをとらえることができた。このことから、視点をもたせて見合う学習方法を継続していきたい。

学習活動全体を通して、自分を大切にすることは友達を大切にすることにつながる。自分や友達のよさをとらえるためには、互いを認め合うことが大切で、そのことが自分や友達の成長を支えているという意識をもたせる取り組みをしている。

本単元の学習で創り出した踊りを、今後の体育学習で継続的に活用する。自分たちで創り上げた運動を積み重ねることで、運動自体の特性や友達とふれ合う楽しさをより一層実感し、心と体が開放される心地よさ・運動を楽しむことのよさに気づくことができると考える。

(4) 単元計画（総時数8時間）

主な活動と内容	かかわりの「場」のデザインと教師の意図
<p>1 みんなで動きをあわせて踊る <リズムに合わせて動いてみよう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ポップスター（PS）早く踊ろうよ ・ちょっとはずかしいなあ ・曲が違って同じ動きで踊れるんだ ・こんな動き難しいよ でもやってみよう ・こんな動きもあるけどどうかな 	<p>○いろいろな動きに「出会う」</p> <p>動きは8呼間のリズムで構成されていることに気づかせるために、PSの動きそのまま曲を変えて踊る活動を取り入れる。</p> <p>他にもいろいろな8呼間のリズムの動きがあることをクラス全体で体験してみることで、踊ることの抵抗感を和らげる。</p>
<p>2 PSにオリジナルの動きを取り入れる <PSをセミオリジナルにしよう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ぼくの考えた動きやってみようよ ・その動きはいいから取り入れよう ・この動きとその動きは似てるから一つの動きにしよう ・この動きの次はこれにしよう ・この動きはこのリズムのときに合うよ ・動きをつなげるときは8呼間目は大切だよ 	<p>○新たな動きを「共有する」</p> <p>一人一人がもち寄った動きをグループみんなで共有することにより、それぞれが考えてきた動きを認め合わせたい。</p> <p>始めはみんなの声を合わせて、ゆっくりカウントを取り、徐々に曲に合わせて行う学習方法のよさに気づかせる。</p> <p>自分の動きの変容に気づかせるために、グループごとにビデオカメラで撮影し、客観的に自分や友達の動きをとらえさせたい。</p>
<p>3 新しい曲に合わせ動きを創る <6の3オリジナルを創ろう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・どの曲がいいかなあ この曲がリズムにのれそうだ ・この曲のイメージはこんな動きかなあ ・PSで使ったときのいい動きがあるよ ・一人じゃこんな思いつかないな ・フォーメーションを工夫しよう> ・六人それぞれが違った動きをしてもいいんだ ・三人ずつの動きにしてみよう ・六人だからいろんな隊形ができるよ ・ペアの人とタイミングを合わせないといけないな ・動きのタイミングが合うと楽しくなってくるよ ・わたしの動きも変わってきたよ ・目線も工夫してみたよ 	<p>○動きを「創り つなげる」</p> <p>新しい曲になっても、既習の動きを参考にできることに気づかせ、これまでの学習を生かすように働きかける。</p> <p>グループで新しい動きや動きのつながりを考え合うことで、友達のよさに気づかせたい。</p> <p>○グループとしての動きを「広げる」</p> <p>運動会の表現で隊形移動があったことを想起させたり、相対する動き等と集団での動きのよさを知ったりすることで、自分たちのグループの動きに生かすことへつなげさせたい。</p>
<p>4 学習をふり返る <撮影会をしよう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ぼくらのダンスはこうだよ ・あんな動きすごいなあ ・わたしもやってみたいよ 	<p>○自分たちの作品を「紹介する」</p> <p>互いの作品を見合うことにより、グループ同士の動きを比較したり、よい動きを見つけたりする中で、互いの変容を認め合うことができるようにする。</p>

(5) 本單元における授業の実際と考察

本單元では、子どもがそれぞれの活動場面において「楽しさ」を味わうことで、「運動を楽しむことよさに気づく」ことに迫る。そのための「場」のデザインとして、「8呼間のリズム」「六人グループ」「振りつけメモ」「ビデオカメラ」を四つのキーワードとする。

動きは「8呼間のリズム」を基本とし、ほとんどの曲に合わせていることができる。このことを子どもが分かることで、子どもは8呼間の動きを考え、それをつなげていくと、曲のリズムに合わせて、踊りを創ることができる。踊りを創るのは難しいと考えている子どもにとっては、驚きから興味・関心へと移行していく活動となるだろう。

グループは、男子三人女子三人の「六人グループ」を編成する。これは、隊形や動きに変化をつけるときにはいろいろな形が考えられることや動きを創るとき一人が二種の動きを考えると、十二種の動きが集まることなどの利点がある。

このとき子どもが考えた動きを、「振りつけメモ」に記録させる。これはグループごとにストックし、いつでも活用していくことができる。

続いて、子どもが考えた動きをつなげ踊りを創る活動では、「ビデオカメラ」を活用する。映像を通して客観的に見ることは、自分の動きやグループの動きを確認し、よりよい動きを創る手だてとなる。特に、グループの隊形変化や動きを合わせたいときに、動き方を確認することができる。また、毎時間継続して撮ることは、活動が進むごとに、自分やグループの動きについての成長を実感することができるというよさがある。

ここでは学習の流れに沿って、抽出児の記録をもとに子どもの様子を分析し、4つのキーワードについて考察していくことにする。

① リズムに合わせて決まった動きで踊る場面

この場面での一つ目のねらいは、リズムに合わせて踊る楽しさを味わわせることである。

そのために、クラス全員が聞きなれた曲「ポップスター」を用い、全員で同じ動きで踊る活動を行った。すると、この活動をくり返し同じ行うことで、「みんな同じ」という意識から恥ずかしいという気持ちが薄らぎ、子どもは安心して踊ることができた。上下左右の空間をいっぱいに使って踊る子どもや、友達と並んで笑顔で踊る子どもの姿が見られた(写真1)。

運動会では準備運動として全校で踊ったが、下級生に比べ動きが小さく、うつむいて踊る姿が多く見られた。単元に入り始めは、個々に踊っていたが、くり返し踊る中で、次第に友達と動きの大きさを競ったり、顔を見合わせながら笑顔で踊ったりする姿が増えていった。教師が声をかけなくても、曲がなり始めると、全員が踊り出すようになっていった。このような子どもの様子から見ても、この活動は踊る楽しさを味わわせるのに有効な手だてであったといえるであろう。

二つ目のねらいは、踊りは8呼間のリズムで構成されていることに気づかせることである。

今まで踊ってきた動きは変えずに、曲を変えて踊る活動を行った。子どもは、曲が変わっても同じ動きで踊ることができることに驚きながら、くり返し踊った。また、踊る中で一つの動きに着目し、動きながら声でカウントした。そうすることで、動きは8呼間になっていることを確認することができた。同様に、その他の動きについても確認し、みんなで動きは8呼間からなることを共有した。動きが8呼間のリズムからなるということは、次のオリジナルの動きを創る活動へつなげるための大切な手だてであったと考える。

② グループごとに一部分オリジナルの動きに替えて踊る場面

ここからは六人グループでの活動となる。この場面での、一つ目のねらいは、自分が考えた動きを友達と合わせて踊る楽しさを味わわせることである。そこで、一人一人が考えてきた8呼間のリズムからなる動きを、グループの友達に伝え、グループみんなでその動きに取り組んだ。このとき、考えた動きは振りつけメモ(資料1)に書き込ませることにした。子どもは友達に自分の考えた動きを伝えるとき、振りつけメモでおおよその動きの感じを示した。また、言葉の補足説明と実際に動いて見せることで、友達に動きを理解させることができた。振りつけメモは、グループの友達に動きを伝えるときに有効であったと考える。また、友達に動きを伝えやすくするために曲に合わせてではなく、声のカウントでリズムをとる練習方法のよさにも気づくこと

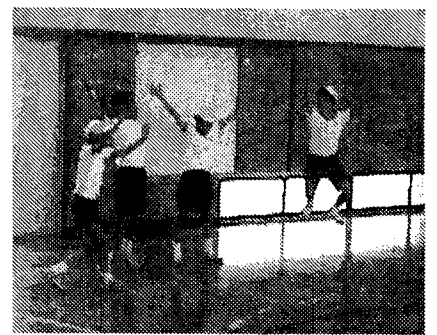
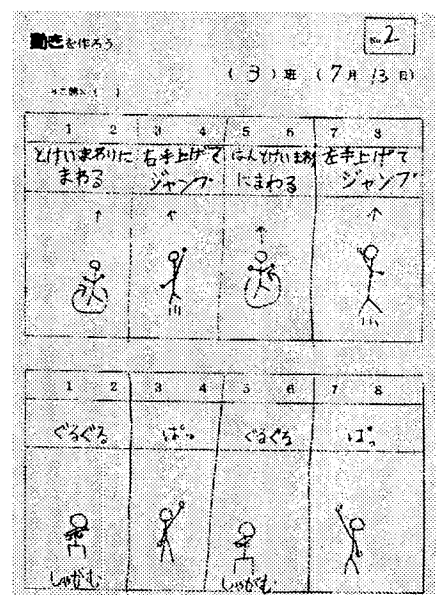


写真1 体いっぱい踊る子ども



資料1 子どもの振りつけメモ

ができた。

次に、グループ内で共有した動きのいくつかを、ポップスターの中の決まった動きと一部交換して踊る活動に取り組んだ。自分が考えてきた動きが、グループの動きとなり踊りに組み込まれることで、踊っているときの表情に真剣さや笑顔が増えるなど、変化が見られた。これは、一部分であっても与えられた動きの中にオリジナルの動きが組み込まれたことによって、自分たちのグループの踊りであるという思いが生まれ、踊りに愛着がわいてきたからだと思われる(資料2)。

このことから、決まった動きの中にグループのオリジナルの動きを加えさせる手だては有効であったといえる。

二つ目のねらいは、自分の体の動きやグループの中の自分の動きを意識させることである。

そこで、毎時間、グループ同士で踊る姿をビデオカメラで撮影することにした。子どもは撮影された映像から、様々なことを読み取っていた。それは、子どものふりかえり(資料3)にも表れている。

C1は、「自分が思っているよりも動きが小さかった。」と書いている。自分の頭で思い描く姿に合わせ、体を動かしていたつもりなのに、客観的に見た自分の姿は、動きが小さく、そのことに驚いていたようであった。C2、C3、C4は、友達の中での自分の動きに着目している。C5は、友達のよい動きに着目している。どの子どもも、映像から様々なことを読み取り、よりよい動きに向け、次の活動に生かそうとしていた。

このように、自分の動きやグループの動きを映像として確認することで、客観的に自分たちの姿をとらえることができたのだと思われる。このような子どもの様子から見ても、ビデオカメラで撮影しその映像を見ることは、自己内比較や他者比較をする上で有効な手だてであったと考える。しかもこのことは、次時の子ども一人一人のめあてへとつながっていった。

③ グループごとに曲を選びオリジナルの動きで踊る場面

この場面では、グループの友達と動きを考えそれをつなぎ、オリジナルの動きを創ること、さらに、友達と合わせて踊る楽しさを味わわせることがねらいである。

まず、新しい曲でグループオリジナルの踊りを創る活動に取り組んだ。活動当初、子どもはオリジナルを創る意欲をもった反面、実際始めてみると難しいと戸惑いももったようであった(資料4)。それは、多くの子どもが最初から全てを自分たちで創らなければならないととらえたからであった。そこで、子どもに既習をふり返らせることで、これまでを考えてきた動きを活用したり、振りつけメモに新しい動きを書き活用したり、振りつけメモに新しい動きを書いたりして動きをつなげていくようにながした。すると、あるグループでは、曲の始めから終わりまでをじっくり聞きいくつの動きが必要であるかを考え、既習の動きに足りない動きを追加する姿が見られた。このグループは、これまでの学習の発展であると考えたものと思われる。ここではグループごとに動きを創る活動に入る前に、全体で「曲が変わっても、これまで使った動きも取り入れていけること」を再度共通理解する教師の手だてが必要であったと考える。

これまで、グループの六人が横一列で同じ動きをするようにながしてきた。すると「より空間を大きく使いたい」あるいは、「よりオリジナルの動きを生かしたい」という思いの子どもから、六人が違う動きをする、隊形の変化をするというアイデアが生まれてきた。そこで、このような子どもの考えに沿い、まず、子どものふりかえりに書かれていた「六人で別々のことをやりたい」という言葉を子どもに伝えた。うなずきながら聞いていた子どもの様子から、自分もやってみたいという考えをもっていることがうかがえた。次に、隊形の変化が現れ始めたグループの映像を子どもに見せ、隊形変化のよさについてみんなで共有した。そうすることで、子どもは活動の見通しをもって、グループごとに相談を始めることができた。それぞれのグループでは積極的にかかわる姿が見られた。

ここで、抽出児A(以下A児)のふりかえりを見ると、「体全部でもっともっととびはねたい」と書かれている。しかし、その思いをグループへ伝えることはできていなかった。もっと激しい動きがしたいと思っていたA児は、グループで相談している際も常に体を動かし続け、「もっと動きたい」と体でアピールしているようであった。そこで、教師はA児の思いをグループに伝えた。すると、賛同する意見が生まれ、グループ自体の動きに変化が見られた。この後、グループに自分の思いが受け入れられたA児は、動

- | | |
|----|---------------------------------------|
| C1 | 班で協力し、オリジナルなものがつくれてよかった。 |
| C2 | エグザイルの踊りがけっこうできていて感げきでした。 |
| C3 | 上半身を回す動きを六人でずらすところは初めてだったけど上手くいったと思う。 |
| C4 | オリジナルでもっともっととびはねたい。 |
| C5 | 動きが大きく新しいオリジナルのものができてよかった。 |

資料2 動きを創り始めての感想

- | | |
|----|--------------------------------------|
| C1 | 自分が思っているよりも動きが小さかった。 |
| C2 | なんだかテンポが速くて。もうちょっと合わせないといけないな。 |
| C3 | 周り比べて、(自分の動きが)すごく動きが小さかった。 |
| C4 | 全体の動きを見て思ったのは、動きが小さいことと微妙にずれていることです。 |
| C5 | Cくんは動きがすごく大きかった。 |

資料3 ビデオを見ての感想

- | | |
|----|-------------------------------------|
| C1 | ミッキーマウスマーチで早く踊りを決めたい。 |
| C2 | 全て自分たちでやるので、考えるのに時間がかかり大変でした。 |
| C3 | 自分たちで一から創ってとてもおもしろかった。 |
| C4 | みんなで創れたと思います。一人一人の意見をちゃんと使えたからよかった。 |
| C5 | 一人一人の個性が出ていた。たくさんのアイデアが出て良かった。 |

資料4 オリジナルダンス開始の感想

きや自分の思いを小さな声ではあるが伝えるようになった(資料5)。このように、なかなか自分の思いを友達に伝えられない子どもには、ふりかえりや行動観察から子どもの思いを読み取り、教師がきっかけを与えることが有効である。子どもの思いが友達に受け入れられ、そこからかわりが深まることで、友達とふれ合う楽しさなど、様々な「楽しさ」の獲得につながっていくと考える。

次に、抽出児B(以下B児)のふりかえりを見ると、「初めはどうか悩んだけど、みんなで意見を出して結構決めることができた」と書かれている。このことからわかるように、グループの友達と協力しながら動きを考え、仲良く活動することができるB児である。毎時間グループ活動の初めにビデオを見て、グループの踊りを確認する時間を設定したが、B児は自分の動きを含め、全体の動きを見ることができていた。これは、資料6-①から読み取れる。ビデオを見ながらB児は「動きを合わせようよ」と友達に呼びかけていた。呼びかけることで「動きを合わせる」ことをグループ内での共通認識としていた。この他にも「見栄えのする並び方」などの課題を見つけ、この後の活動につなぐことができた。

「動きを合わせる」課題を見つけたこのグループは、まず、初めから一つ一つの動きを順番に確認していた。次に、そろわない動きは、見栄えや動きやすさを考えながら、全員で動きを統一していた(資料6-②)。さらに、B児は「新しい動きを入れる」ことをグループの友達に提案していた(資料6-③)。これは、ビデオを見て、動きに変化を入れたり隊形の変化を入れたりした方が、よりよい動きを創り出せるとイメージを膨らませたからであろう。このように、B児は意欲的に自分の思いを表出し、友達と協力しながら動きを創ろうとしていた。

以上、二人の抽出児からいえることは、グループの中で自分の思いを伝え、自分の考えた動きを踊りの中に入れることで、様々な「運動の楽しさ」に迫ることができるということである。しかし、A児のように自分の思いを十分に伝えることができなかった子どももいるだろう。前述のように、互いに認め合い、成長を支え合うクラス作りを今後も継続的に取り組んでいくことで、自分の思いを友達に伝えていけるようにしていきたい。

この活動によってそれぞれのグループの隊形は、次のように変化していった。曲の始めを縦一列で始めるグループや曲の途中で三人×2列へ移動するグループ、円形を作り中心を向いて踊るグループ、二人を中央にしてその周りを周回するグループ、前列の三人と後列の三人が入れ替わるグループ、組体操の動きを取り入れるグループ、相反する動きを取り入れるグループなど、グループごとにアイデアに富んだ動きや隊形が導入されていった(写真2)。これは、子どもが自分たちのグループのオリジナルの踊りをもっとよくしたいという願いが形になったからだと思われる。

このように子どもの様子から見てもこの活動は、オリジナルの踊りを創る喜びや創った踊りを友達と合わせて踊る楽しさを味わわせるのに有効な手だてであったといえるであろう。しかし、この時点で、他のグループとの交流はペアグループでのビデオ撮影を通してが中心であった。お互いの踊りや動きについて意見の交流をもっと活発に行うと、互いのグループのよりよい動きへとつながっていったであろう。

④ 自分たちで創り上げた踊りを他のグループに見せる場面

この場面では、自分たちの創り上げた踊りを発表し、他のグループに認めてもらう楽しさを味わわせることがねらいである。

ここでは、他のグループの前で、1グループずつビデオカメラで撮影をする場を設定した。これまで、子どもは自分たちの踊りとペアグループの踊り以外は、じっくりと見る機会はなかった。そのため見ていた子どもは、リズムをとりながら体を動かし、さらに、発表しているグループの踊りを一緒に踊り始めた(写真3)。このような子どもの姿は、他のグループの踊りを認め、共有したいという思いからの姿であると考えられる。

- | | |
|----|-----------------------|
| C1 | 1, 2, 3・・・なかなかいいね。 |
| A児 | それをどこで入れるの、そこを決めない。 |
| C1 | 間のところに入れれば、止まる所で。 |
| A児 | え一つ。 |
| C2 | 一度流して決めれば。 |
| C1 | どこに入れるか考えてみて。 |
| A児 | 考えながらいっしょに踊る。 |
| C1 | やってみよう。
(実際に踊ってみる) |
| A児 | 今のでいいね。 |

資料5 A児のかかわり

- | |
|---|
| ①前時のビデオを見ての踊りの確認 |
| 「動きバラバラじゃない。早いよ、C君。バラバラでしょ、合わせようよ。並び方こうしたらいいんじゃない。」 |
| ②動きの確認 |
| 「間違ったかも。どっち回りだけ?これやりにくいよ。」 |
| ③新しい動きの提案 |
| 「一人ずつ順番に立っていこうよ。1, 2, 3...6、二人足りない。一人ずつにすればいいかな。」 |

資料6 本時のB児の発言

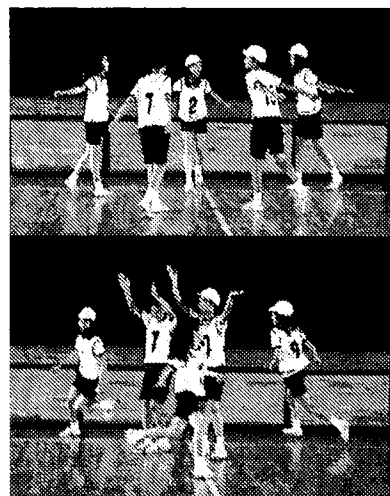


写真2 踊りの隊形変化



写真3 真似をして踊る子ども

このような子どもの様子から見ても、他のグループの前での撮影会は、一体感を与え認め合う場としてよい手だてであったといえる。

(6) 成果と今後の課題

まず、四つのキーワードについて述べる。

踊りは「8呼間のリズム」から構成されていることを、一つの動きに着目し声でカウントすることを通して気づかせた。子どもはこの他にも様々な動きを例にとり、確認する中で、驚きとともに実感することができた。そうすることがこの後の、8呼間のリズムの動きを自分で創ること、さらに、グループの友達と見合い一つの動きへとつなげていく活動につながっていった。踊りは「8呼間のリズム」で構成されることを教えるのではなく、子どもに気づかせ実感させるまで確認したことは、よりよい動きを創っていく上で重要だったといえる。

次に「振りつけメモ」についてだが、六人が考えた「振りつけメモ」をストックし、それを活用していった。「振りつけメモ」がもととなり新しい動きが生まれたり、変化させたりすることができた。六人のアイデアを相談しながらよりよい動きに創ることもつながっていった。このことから「振りつけメモ」をグループでストックすることは、動きを創ることに有効な手だてであったといえる。

また、「六人グループ」での活動は、隊形の変化に工夫をするには適当な人数であった。既に述べたが、いろいろな隊形変化の工夫が見られ、そのグループごとにオリジナルの動きを見ることができた。この単元においては有効であったと考える。

最後に「ビデオカメラ」であるが、子どもの動きをビデオで撮影し、グループごとに自分や友達の動きを確認しながら授業を進めていった。全員が同じ動きで踊っていたときは、友達の動きと自分の動きを比較し、よりよい動きを求める姿が見られた。また、グループで動きを合わせるときも、ビデオで確認することができた。「ビデオカメラ」は動きを確認するにはよい手だてであっただろう。踊りを自分で創るということを難しいと感じていた子どもは、この単元を通して、自分でもできるという自信や満足感を得たに違いない。もともと体を動かすことが好きである子どもは、人前で踊るという恥ずかしさ以上に、曲のリズムに合わせて踊る楽しさや友達と協力して創り上げることのよさ、友達と踊ることの楽しさを感じ取ってくれたものと思う。

以上これら四つのキーワードは手だてとして概ね有効であったと考える。子どもはそれぞれの活動場面において「楽しさ」を味わうことができ、「運動を楽しむことのよさに気づく」ことができたであろう。

しかし、いくつか課題として残されたこともある。

一つ目はグループでの活動が中心で、他のグループとのかかわりが希薄になったことである。他のグループとかかわる機会を多く設けることで、他のグループの動きを見て、そのよさが分かり、グループごとによい動きを取り入れ工夫したり、互いに認め合う機会となったりしたことだろう。視聴覚機器の有効な活用や、グループ同士のかかわりのデザインについて、今後も探っていきたい。

二つ目は、グルーピングである。今単元では生活班の六人グループで活動した。体育の学習以外にもすぐに集まり相談できるよさを考慮してである。しかし、グループ活動においては、構成員のもつ能力・資質で活動が変わってくる。このことから、事前調査を活用し、子どもの興味や関心でのグルーピングや、この他にもよりよいグルーピングを考えていきたい。

三つ目は、領域の系統性と子どもの実態を考慮した上での学習内容であったかという点である。学習指導要領によると6年生・表現では、「変化と起伏のある表現に取り組み、友達や他のグループの動きを見て、そのよさが分かる」ことがねらいである。今回は「リズムのよい曲」を題材として取り上げ活動したが、いろいろな題材で、グループごとにテーマを選ばせて活動することも今後取り組んでいきたい。

体育科では知識創造に迫るために「身体感覚による気づきをうながす」とこと、「友達とかかわる中で、運動にかかわる知識を獲得するよさを実感させる」ことに重点を置く。

既習の短距離走やバレーボールの学習では、子どもの意識や学習のめあての中心に運動技能の向上があり、単元構成もその点を考慮しての取り組みであった。それに比べ、本単元では、動きを合わせ「友達とふれ合う楽しさ」や、踊ることで「心と体が開放される心地よさ」を積み重ねる中で、よりよい動きという「身体感覚による気づき」を得ること、そして「運動にかかわる知識を獲得するよさ」に迫る取り組みであった。

このように、本単元は子どもの実態に沿う運動の特性として、これまでの単元とは幾分異なる取り組みとなったが、このような特性を持つ単元においても、体育科における知識創造を育むことができたといえよう。「踊るということを自らの生活に活かす」という点については、今後体育学習の準備運動で、長期的に扱う中で培っていききたいと考える。

本単元の実践を通して得た成果と課題を、今後、子どもの実態をしっかりと見据え、学習内容を工夫し、より効果が上がる「場」のデザインを考えていきたい。